

秋山は友達と二人でファミリーストランに入った。扉を開けると、

「いらっしやいませ！」というウエイトレス達の声が店内に響いた。お昼のランチタイムで活況のいい店の出入り口には、順番待ちの客が溢れている。

「二人なんですけど、どれ位待ちますか？」秋山が案内係に尋ねた。

「おそらく二、三十分はお待ちいただくことになると思いますが・・・」

「二、三十分ですか、構いません。待ってます」

「恐れ入ります。それでは、お名前をお願いします」

「秋山です」

「秋山様ですね。お席は禁煙席、喫煙席どちらがよろしいですか？」

「禁煙席をお願いします」

「はい、わかりました。ではお名前をお呼びするまで暫くお待ちください」

イスに座って順番を待っていると、およそ二十分後によく「秋山」の名前が呼ばれた。

「二名でお越しの秋山様、秋山様！ たいへんお待たせいたしました」

席へ案内されると、二人はすぐにメニューを広げ、注文の品を決めた。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

「はい。あさりのリゾットと、エビドリアと、海の幸のサラダと、オニオンスープ、それにウーロン茶、アイスコーヒー、あんずのタルト、アイスクリーム、以上でお願いします」

「申し訳ありません。あんずのタルトは本日終わってしまったんです。今ございますのが、レアチーズケーキ、いちごのショート、それに、アップルパイとチョコレートケーキになります」

「では、アップルパイで」

「アップルパイですね、かしこまりました。それと海の幸のサラダのドレッシングは何にいたしますか？」

「何の種類がありますか？」

「和風、イタリアン、中華、フレンチ、梅ドレッシングの五種類がございます」

「そうですか。では梅ドレッシングをお願いします」

「はい、かしこまりました。お飲物は食前食後のどちらにいたしますか？」

「食前をお願いします」

「かしこまりました。それではご注文を繰り返します。あさりのリゾットがお一つ、エビドリアがお一つ、海の幸のサラダが梅ドレッシングでお一つ、オニオンスープがお一つ、ウーロン茶がお一つ、アイスコーヒーがお一つ、アップルパイがお一つ、アイスクリームがお一つ、以上でよろしいでしょうか？」

「はい、結構です」

注文を終えてから数分後、ウーロン茶とアイスコーヒーがテーブルに運ばれてきた。